

哲学散歩 5



Jean

任しています。エリートの典型のように思えますが、健康上の理由で大学から離れ、孤独な思索的放浪に突入していきます。最後は精神上の病にかかり、不遇な最後をとげるのですが、短い生涯のあいだに書き上げた著作群は、いまだに強い影響力を持ったものになっています。ニーチェの有名な言葉に「神は死んだ」というのがあります。当時のすべての常識、権威に抗い、世界とはなにか、人はいかに生きるべきかを、鋭すぎる洞察力とともに考え抜いた孤高の哲学者でありましょう。散歩でもしながら、気ままに哲学じみた考えにふけるのはわけがちがいます。あらゆる物質が原子や分子から成立しているように、人の思考も化合と分解を繰り返しながら、化学反応式のように展開していると思えるときがあります。ただしその反応式には創造力という人間定数が紛れ込んでいるにちがいないのですが・・・。

日本における大学教育制度は、明治期に東京帝国大学の設立とともに本格的に始まりましたが、その内実は西欧の大学制度を模範とすることで成立していました。哲学という学科も西欧の教授方を招聘して始まった次第です。当時の哲学教育は文学部において中心的な場を占めていました。専攻する学生も相当多くいたようです。それによって職を得る道も開けていました。が、現在の大学で哲学を専攻する人は相当な希少種といっているんですね。主にドイツ系の教授によるドイツ哲学が展開されていたことは、当時のなだたる学生陣の軌跡に触れると、容易に推測されます。カントに続くフィヒテ、シェリング、ヘーゲルらが代表的な哲学者として挙げられます。その後続く哲学者もビッグネームとされる人が多数登場してきます。なかでも異彩を放つのはニーチェではないでしょうか。1844年、プロイセン王国領プロヴィンツ・ザクセンで生まれ、学業優秀のうちに成長していきます。ボン大学、ライプツィヒ大学



▲大学卒業後、神学を学んだアントニオ神学院(東京 世田谷 瀬田)

私が『ずっと大好き』の報告書



【アポロチョコレート】

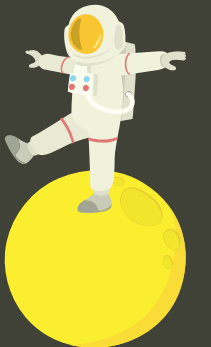


『1969年8月7日に明治「アポロ」が誕生しました。

1969年7月21日、人類初の月面着陸がアメリカ宇宙船アポロ11号によって達成されました。その模様を伝える映像は世界中から注目を集めました。かわいい「アポロチョコ」のあの三角形は、宇宙船のカタチからイメージして作ったものなのです。』

…だそうです！

私はチョコレートが好きで、よく食べているのですが、アポロは「好きすぎて買えない」シリーズのひとつです。コンビニなどで見かけますが、目を合わせないようにしています。期間限定などで発売される「大きいおいしい高いアポロ」はとりあえず買っておいしくいただきますが、定番アポロはやっぱり好きすぎて購入をためらいます。簡単に買えないのです。



アポロ食べたいんですよ？でも食べたくないんですよ。わかってもらえます？

今回紹介する作品は装甲騎兵ボトムズです。

この作品はハードボイルドな描写とリアル志向のロボットを世界設定としており、今までのアニメにあった青年が成長していくストーリーではなく経験豊富で操縦に長けた兵士が悲惨な戦争をどう生き延びどう人間性を取り戻していくかを主体に描かれています。

この作品の特徴として、登場するロボット・アーマードトルーパー(AT)が人命よりも生産製を優先させた兵器で機動性はあるが装甲が薄くすぐに破壊されてしまうところです。作中では“鉄の棺桶”と呼ばれていました。

主人公(キリコ・キュービー)が乗る機体は特別な専用機ではないというその当時では珍しい設定でした、でもそこがヒーローという扱いではない一人の兵士としてのリアルな描写に一役かっています。

ATのデザインもミリタリー色が強く顔の部分に付いているカメラや剥き出しになったボルトやナット、全長が3.8mという小柄な設定も相まってアニメファン以外の戦車などのプラモデルを作っている層も獲得しました。

今でも多くのファンがいる作品ですが、東京都稲城市にあるいなぎペーパーパーク内に作品に登場した「スコープドッグ」の等身大モニュメントが作られました。いつか見に行ってみたいものです。



ST

むせるな〜

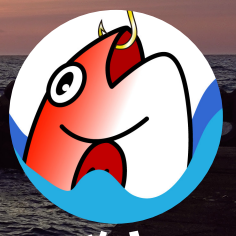


モロコ よもやまばなし

★霜月：竜胆の間★

秋も深まる濃い内容となった竜胆の間。今年は急激に寒くなり深まる秋を堪能する前にもう冬に突入ですね～。さつまいも栗ご飯をいただきました。秋刀魚は今年も細身ですね…。さあまだ余裕があります！早めの年賀状準備を！喪中の方はお急ぎください！！

カメラで
そろそろ



やま

核戦争後を扱った映画なんかで、長い長いシェルターごもりの後、放射能の弱まったであろう地表に向けていよいよ重いハッチを開く...そこには待ちに待った外の世界のまばゆい陽光が...なんてシーンがあると思いますが、我々は今、歴史上のそんなシーンのひとつに実際にいるんじゃないかという気がしています。映画みたいにエンドロールが流れてせんぶハッピーエンドというわけではありませんが、当事者にとって歴史なんてそんなもんなんでしょう。でもだからこそ、自分の手で、ひとつの明確な「くざり」をつけたいと思いませんか。つまり、端的に換言すると、旅行に行ってきた。